30 ヴァイス 『服装学』衣服と道具の歴史 全4巻

Weiss, Hermann. Kostümkunde. Geschichte der Tracht und des Geräths. 4vols. Stuttgart, Ebner & Seubert, (1860—1872) 1872—1883. 22.8×15.3 cm 〈383.1-W-1～4〉
Hiler p. 896　Colas 3063-3065　Lipp. 71-72

Lipp.によると，本書の初版は1860年から1872年までに全3巻5冊で刊行され，初版の第1巻2冊は，首題と異なって，Handbuch der Geschichte der Tracht, des Baues und des Geräthes der Völker des Alterthums（古代民族の服装，建築と道具の歴史便覧）となっている。第2版は，更に研究を重ね，初版刊行から9年後，第1巻2冊と第2巻1冊に加筆補正を行い，全2巻の形で出版された。本館には，第2版の2冊と初版第3巻上・下の2冊計4冊を所蔵しているので，内容的には著作のすべてが収録されている。各巻の標題は次のとおりである。

1巻“・・・der Völker des Alterthums”（古代民族の衣服と道具の歴史）1881年　第2版

2巻“・・・im Mittelalter vom 4 bis zum 14 Jahrhundert”（4世紀から14世紀までの中世の衣服と道具の歴史）1883年　第2版

3巻“・・・vom 14ten Jahrhundert bis auf die Gegenwart”（14世紀から現代までの衣服と道具の歴史）

上巻“Das Köstum vom 14ten bis zum 16ten Jahrhundert”（14世紀から16世紀までの服装）1872年　1—509pまで

下巻“Das Köstum vom 16ten Jahrhundert bis auf die Gegenwart”（16世紀から現在までの服装）1872年　510—1432pまで

各巻の内容は，第1巻の「古代民族」は，第1節アフリカ民族の服装（エジプト人，エチオピア人）　第2節アジア民族の服装（アラブ人，西アジア民族，アッシリア人と(新)バビロニア人，メディア人とペルシャ人，ヘブライ人，小アジア民族，インド人）　第3節ヨーロッパ民族の服装（北東ヨーロッパと北西アジア民族，北方・中央・西ヨーロッパ人，ギリシャ人，イタリア人）

第2巻の「4世紀から14世紀までの中世」は，第1節ビザンチンと東方民族の服装（ビザンチウムの住民，新ペルシャ人，アラブ人），第2節ヨーロッパ民族の服装（東欧民族，北欧・中欧・西欧の民族）

第3巻上巻「14世紀から16世紀までの服装」第1節14世紀初頭から16世紀初頭までの服装（フランスとイギリス，オランダ，ドイツとスカンジナビア，イタリア，スペイン，ロシア・ポーランドとハンガリア）　下巻第2節16世紀の服装（スペイン・フランス・イギリス，ドイツ・スカンジナビアとスイス・イタリア，ポーランドとロシア）第3節17世紀の服装・・・，となっている。時代ごと，地域ごとに区分された記述の内容は，まず歴史的概観が述べられ，次に服装と道具類に大別され，服装では衣服，かぶりもの，履物，装身具などと結婚式や埋葬など

の慣習と行事，道具類では，例えば大工，石工，織機などの手工業用機具，家具装飾品，容器，家庭用具，楽器，兵器，時代を象徴する文化遺跡，考古品などと服装を中心に様々な有形物，技術などを集大成している。解説には木版による図解が豊富に付されており，初版の図版は著者自身によるものである。再版には更に8枚の石版彩色図版が追加され，各巻の末尾には索引が付されている。

服装に関する文献は，これまで数多く刊行されており，服装一般と道具の双方の歴史を関連させて著したものとしてはラシネやホッテンロートの著作が知られているが，総合的かつ体系的に著述したものとしては，本書が最初といってよい。

著者ヴァイス（Carl Jacob Hermann Weiss 1822—1897）はドイツの画家・歴史版画家で，ハンブルクに生まれた。ベルリンの肖像画家ヨハネス・オットー（Johannes S. Otto）を師として学んだ後，デュッセルドルフで絵画の研究を続け，1856年にはベルリン・アカデミーの教授になった。服装史の研究は1850年ごろから始めている。ヴァイスはこの分野における古代から現代までの文化史を一つの完結した著作の中で公表するという計画を温めて執筆に着手したが，その領域の広範さゆえに当初予定されていた分量よりも拡大せざるをえなくなり，多くの研究者から完成があやぶまれるほど増大し，刊行までには約17年という長年月が費やされた。従来この分野の既存の研究はきわめてちぐはぐな状況であった。つまり，服装史においても，道具史においても，ある題材については過多である一方，他の題材では皆無に等しいほど着手されていない。したがって多すぎる場合は，入念な吟味による取捨選択が必要となり，不足している場合は，もれなく探索し，自らも研究して慎重に確定するという作業が要求される。本書を計画した意図について，著者は初版の序で「読者の側からすれば，本書に掲げた各項目は全体的に不釣合いな印象を受けるかもしれないが，個々の項目はそれぞれ独立していてその素材に応じた固有な扱いを必要としたためで，単に学問自体の問題だけではなく，芸術のためにも，特に実際に製作する場合にも役立たせようという配慮から，こうした処置が取られた。とりわけ，この分野では個々のものを細部にわたって記述しようと努めれば，それは果てしないものになってしまう。だから本書もより一層の歴史的基礎づけと解明のための礎石にすぎないとしても，目的は達せられるであろう」と述べている。

人間が自然を支配して徐々に生活環境を好転させてきたその方法や手段，技術を理解するためには，各時代の政治・経済などの歴史をたどりながら考察することが必要になる。しかし，いわゆる〈技術〉の進歩は必ずしも歴史の変遷と一致しているわけではない。この研究も個別的には，これまでも探究されてはきたが，多くは好事家的に，また図集の形で取り扱われてきた。本来の意味での学問として記述されるようになるには，次の時代を待たねばならない。

（平井）